

# 紅葉川 「攻撃野球」



**エース**

**松本空 (3年)**

キレイのあるストレートと縦横幅の大きい変化球を駆使する右腕。投球術も備える都立屈指の投手だ

**PICK UP!**

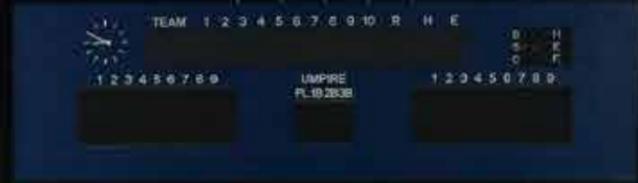
**田内康之助 (3年=一塁手)**

181センチ81キロの体躯からのパワフルなスイングで長打を放つ主軸

**主将**

**島津青波主将 (3年=捕手)**

勝負強さとパンチ力を秘めた主砲。キャプテンとして攻守でチームを盛り上げていく



## 自慢の打線を武器に、いざ夏へ 投打の軸が揃う東東京ダークホース

今春都大会で3回戦(ベスト32)に進出した紅葉川。昨夏も4回戦(ベスト32)へ進出するなど地力を蓄えるチームは、自慢の打線を武器に東東京大会へ挑む。

■城東出身の松坂世代指揮官

高校野球の激戦区である下町・江戸川で着々と地力をつける都立ダークホースだ。2018年度から野球部がスポーツ特別強化校に指定されて、下町の野球小僧たちが門を叩く。2019年夏にはシード校として大会を迎えて5回戦へ進出。昨夏は最速142キロのエース山崎正義(2022年春に独立リーグ徳島入団)を軸に4回戦へ進出する好結果を残した。チームは

2019年夏まで田河清司監督(2015年育成功労賞)が率いたが勇退によって、2019年秋から高橋勇士監督がバトンを受けた。松坂世代の指揮官は城東出身。熱い思いを込めて選手たちに都立野球を伝授している。高橋監督は「選手たちの成長が一番の喜びです」と選手に寄り添う。

■松本と佐藤のダブルエース

昨夏はエース山崎が絶対的存在だった。今年のチーム始動時は、投手難が課題だった。高橋監督は「1試合9イニングを9人で投げることも考えるくらいだった」と話すが、タイプの違うピッチャーが台頭してきた。春の背番号1は松本空(3年)だが、春都大会後には背番号9の

佐藤陽斗もエース級へ成長している。松本は、変化球を巧みに操る技巧派。ストレートは球速以上の速さを感じる。佐藤はストレート、変化球を四隅に集めて安定感抜群のピッチングをみせる。東東京大会は、松本と佐藤のダブルエース体制でゲームに臨む可能性が高い。夏は天候などによって過密日程での試合も想定されるため、二人の存在はチームの好材料だ。

■「攻撃野球」と「一心不乱」

今年のチームのスローガンは「攻撃野球」と「一心不乱」。過去2年間は、投手を中心にした守備野球を志してきたが、私学実力校相手に食らいつきながら打てないゲームが続いてきた。今季は、投手陣に課題があったことから「攻撃野球」にシフトチェンジ。校庭で黙々と打撃練習を繰り返してきた。島津青波主将(3年=捕手)、田内康之助(3年=一塁手)、平優樹(3年=外野手)らが鋭い打球を飛ばすようになり、打線の厚みが増した。打力が上がることで、投手陣も

奮起。夏直前となった今は、投打のバランスが整い始めた。攻守の要・島津主将(3年=捕手)は「1~9番までどこからでも得点が奪えるのが今年のチームの特長。打撃陣でピッチャーをサポートして全員で勝ち上がっていききたい」と夏の大暴れを誓う。紅葉川は、「一心不乱」に勝利だけを見つめる。

紅葉川高校

【住所】東京都江戸川区臨海町2-1-1  
【創立】1908年 【甲子園】なし  
100年以上の歴史を有する都立の伝統校。元々は中央区の日本橋兜町に校舎があったが、1986年に現在の江戸川区に移転。通称「紅高(もみこう)」。伝統的に部活動が盛んで、2018年度より野球部がスポーツ特別強化校に指定された。

### 主将の チーム分析

島津青波 主将  
(3年=捕手)



### 『攻撃野球』で勝ち上がる

「今年の紅葉川は、打撃のチーム。1~9番までどこからでも長打が飛び出す力を持っています。気持ちを込めたスイングで、スタンドへ飛ばしていきます。投手は、松本空、佐藤陽斗、平川光希が軸。打撃で投手陣を援護して、スローガン「攻撃野球」で勝ち上がっていききたいと思っています」

紅葉川・高橋勇士監督

### 自信を持ってプレーしてほしい

「スローガンの『攻撃野球』は、打撃だけの言葉ではなく、守備も走塁も果敢に攻めていることを求めています。自分たちは失うものではありません。選手たちには結果を恐れることなく自信を持ってプレーしてほしいと思います」



1980年東京都生まれ。城東一休大。母校・城東での非常勤、中学教諭を経て片倉へ。宮本秀樹監督のもと野球指導を学び、2019年春に紅葉川へ異動。同年秋から監督。